



Title	都市中心部における小規模観光事業の展開過程に関する一考察：個人・家族・同人グループ経営の宿泊施設「ゲストハウス」を事例として
Author(s)	石川, 美澄
Citation	日本生活学会第38回研究発表大会梗概集, 54-55
Issue Date	2011-05
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/52574
Type	conference presentation
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	summary.pdf (2011年5月生活学会要旨)



[Instructions for use](#)

都市中心部における小規模観光事業の展開過程に関する一考察

—個人・家族・同人グループ経営の宿泊施設「ゲストハウス」を事例として—

○石川美澄¹

1. はじめに：背景と目的

観光を通じた個人の収入確保や地位確立、多様な人びととのネットワーク形成やその拡大には、小規模事業の存在が不可欠である。また、観光関連の小規模事業（以下、小規模観光事業）の所有と経営は、個々の事業者に経済的利益と社会的便益をもたらすとされている（ヴァレン L. スミス 1995）。スミスは、第三世界を対象としてこのような主張をするが、筆者は国内における小規模観光事業者にも同様のことが指摘できる可能性が高いと考えている。

本稿では、小規模宿泊施設の一つである「ゲストハウス」（以下、GH）を取り上げ、北海道札幌市中心部（以下、札幌）で宿泊事業を展開する事業者（以下、GH 事業者）の①開業までの経緯、②GH 利用経験、③同業者との情報交換の有無を整理する。その上で、札幌での GH 事業の展開過程の背景について、GH 事業者の社会的背景を軸とした考察を行うことを目的とする。それにより、札幌における GH 事業の展開過程の基礎資料としたい。

なお、本稿では、GH を「個人や家族、友人同士等の同人グループの経営・運営されている比較的小規模で低廉、かつ相部屋制度と素泊まりを基本とする宿泊施設」とする。この定義は便宜的なものであるため、今後より精査化する必要がある。

2. 事例選択理由と調査手法

小規模宿泊施設の中でも、特に GH と GH 事業者を事例として選択した理由は、主に 2 つある。1 つは、小規模宿泊施設を対象とした既往研究では、温泉地や農山漁村地域における民宿やペンション、ユースホステルとその事業者に関する事例が多い点である。もう 1 つは、都市中心部の小規模宿泊施設や GH を体系的に捉えた研究が、筆者が管見した限りほとんど見られない点である。また、札幌を取り上げた理由は、次の 2 つにある。それは、札幌は、北海道観光のハブ的な機能をもつ都市でありながら、他都市と比べて小規模宿泊施設が少ない点と、2008 年以降に、相次いで 4 つの GH が開業している点にある。

調査手法は、2011 年 3 月に実施した GH 事業者（4 人）に対する聞き取り調査である。それによる一次データを、1 章で示した

3 つの項目（①～③）に整理し、分析した。

3. 4 人の GH 事業者への聞き取り結果

まず、4 人の GH 事業者を A, B, C, D 氏（仮名）として、下記の表 1～3 にそれぞれの結果をまとめた。なお、表中の「」は補足を適宜行っているものの、基本的には 4 人の発言を引用した。また、札幌に 2001 年に開業した GH は Z（仮称）とした。

表 1：GH 開業までの経緯

A	転勤により、札幌での生活を始める。札幌での暮らしやすさが気に入り、しばらく住み続けたいと思ったため、次の転勤が決まる前に退職する。その際、学生時代から続いていた“マンション暮らし”ではなく、「家に住みたい」と思い、物件を探し始める。しかし、自分一人で入手可能な価格のものが少ないことを知る。そこで、「中古物件をリノベーションして、友人たちとシェアをする生活をしたら面白い」と考え、物件探しや改装を「自分たちのやりたいことを優先」で行う。その後、様々な課題があり、シェア生活は実現には至らなかった。しかし、同時期に友人と旅の話をするなかで、海外で利用した GH のことを思い出す。その後、Z に宿泊して話を聞こうと試みるが、直接話を聞く機会はなかった（2008 年 6 月頃）。「でも、GH をやってみるのは面白そうだ」と思い、GH 開業に向けて動き始め、2008 年秋に開業に至る。
B	札幌生まれ。会社員時代を経た後、約 3 年間旅を中心とした生活を送るが、その間に母親を亡くす。「親に縛られることもなくなり、より自由になれると思っていたが、それは逆で、守るものがなくなったことで自分には何か守るものが必要だ」と思うとともに、「ホームがほしくて、ホームを作りたい」という考えを抱くようになる。その後、旅先での人との出会いを通じて、「生まれ育った札幌の街で、人と人との縁をつなげるようなこと」ができないかと考え、2007 年 1 月頃から GH 開業に向けて動き出す。そして、2009 年春に開業に至る。なお、B 氏は、GH 開業のきっかけの一つとして、特に沖縄の GH の魅力やそこで様々な人との出会いに大きな影響を受けたことを挙げている。
C	数年間の海外生活、ならびに 1 年間のワーキングホリデーとその後の東南アジアの旅行を経て、日本に帰国する。帰国時期が冬だったということもあり、日本でのウインタースポーツを楽しみたいという思いから、ニセコ（北海道）での職を探す。しかしながら、既に繁忙期に入っていたために希望する求人ではなく、道内の他のリゾート地で職に就く。シーズン終了後は地元に戻るつもりだったが、「北海道での生活は良いかも」と思い、札幌で働き、暮らし始める。「この頃から GH をやろうかと思いつつ、もし本当にやるならどこがいいだろう

	うと探し始めた。」そして、札幌は道内観光の起点となっているにも関わらず「圧倒的にGHの数が少ない」ことから、札幌で開業するのもよいと思うようになる。退職後、GH開業に向けて動き出し、2009年秋に開業に至る。なおC氏は、GH開業のきっかけの一つとして、自身が海外のGHでもてなされたように、海外からの旅行者を日本でもてなしたいという意識があったという。
D	札幌生まれ。一時は札幌を離れるものの、大学卒業時までは主に札幌で過ごす。その後、道外で会社員生活を送る。退職後は札幌に戻り、海外での語学留学と旅行を経験する。その後、自身の働き方について考えた結果、次に就く仕事はできる限り長く続けたいと思い、「自分に合った仕事」を探すためにハローワーク等に通う。この頃から、海外の人と何らかのかたちで関わる仕事がしたいと思いはじめ。そして、青年海外協力隊の志望動機を書いているときに、「祖母が残したマンションの一室を使って、札幌で何かできないか」と思い立ち、語学留学や旅行時に利用していたGHのことを思い出す。その後は、大学ノートに“Guest House Project”と題したGHに関する構想を書き出すと同時に、札幌のGHの「現地調査」を行い、2010年冬に開業に至る。

表2：開業に至るまでに経験したGH利用

A	海外のGH利用経験はあったが、Zに宿泊するまでは国内のGH利用経験はなかった。
B	国内外のGH利用経験があった。
C	海外のGH利用経験はあったが、国内のGH利用経験はなかった。
D	国内外のGH利用経験があった。

表3：同業者との情報交換等のやりとり

A	当初、シェア生活を始めるつもりであったために、開業までは同業者とのやりとりをすることはなかった。「細かいことを準備する前にイメージで創った感じ」だったという。
B	GH開業に向けて、札幌市や近隣市町村の同業者を訪ね、話を聞いている。また、開業に至るまでの取り組み（手順や課題等）をブログ上に公開するなどしている。なお、同業者とのやりとりではないが、ブログやSNS、商工会の講習会、友人等を通して、不動産屋や一級建築士、大工経験者、経営支援の専門家等と知り合い、情報交換を行っている。
C	初めにB氏、次にA氏の元を訪ね、開業するための手続き等に関して話を聞いている。それ以外のGH事業者とは、開業に至るまでは特にやりとりしていない。
D	A, B, C氏とZ氏のもとを訪れ、話を聞いている。D自身のGH開業前の繁忙期(夏季)には、A氏のGHにおいて短期間のヘルパー（GHの清掃等に対して労働力を提供する代わりに、寝床や食事を提供してもらう役割を担う者の呼び方）として関わっている。

また、各GH事業者の経営・運営形態については、次の通りである。A氏は株式会社を立ち上げた上でGH事業を展開しており、B氏は、現在は夫婦での経営となっているものの、実質的にはB自身による経営・運営である。C氏はC自身の経営・運営であり、D氏はD自身による運営である。なお、これら4人の事業者は、札幌の観光の現状やGH経営等についての情報交換の場として、「宿屋会（やどやかい）」という機会を設け、不定期で集まるなどしている。

4. 考察とまとめ

以上の結果を踏まえると、まず2008年以降の札幌におけるGHは、A, B, C, D氏の順で開業したことが分かった。ただし、GH開業に向けて実際に取り組み始めた時期については、B氏が最も早かった。

次に、4人のGH事業者が①なぜ札幌という地域で、②GH事業を展開するに至ったのかという背景について考察する。①については、GH事業者が札幌市出身であったり、札幌（あるいは北海道）での暮らしが気に入ったりしたという地域に対する思い入れやそこでのライフスタイルに魅力を感じているという点が指摘できる。また、C氏が言及しているように、札幌は北海道における観光の起点であるにも関わらず、他の観光主要都市（例えば那覇市や京都市など）に比べるとGH数は少ない傾向にある。そのため、GHを利用しながら様々な国や地域を旅行した4人にとっては、札幌の宿泊施設の大半がホテルで占められている現状に対し、「旅行者の宿泊施設に対する選択肢が少ない」等の意見を抱いたり、その点にビジネスの可能性を見出したりしたことが関係しているのではないかと推察される。また、②については、個人が旅行等を通してGHの安価な料金設定や、GHでの事業者や他の旅行者との出会いや交流に魅力を感じたり、価値を見出したりしていることが影響していると考えられる。

したがって、札幌における小規模観光事業としてのGHの展開過程の背景には、GH事業者のもつ2つの側面が相互に影響していると思われる。その1つの側面は、札幌や道内での生活を通して得た地域に対する経済的・社会文化的な魅力と可能性という面であり、もう1つはGH事業者個人それぞれのそれまでの旅行や留学等を通して得たGHや人との出会いの良さに対する価値観の獲得・体得という旅の経験に関する面である。

5. 今後の課題

今後は、札幌市の他のGH事業者への聞き取り調査を進めるとともに、国内におけるGHの実数や分布状況等の実態把握が必要である。また、小規模観光事業を通じた個人の内発的・自律的な発展、ならびに人と人との関係性構築とその関係性から派生する社会文化的効果に関するより詳細な考察が求められよう。

引用文献

ヴァレン L. スミス(1995)「第三世界における私企業化：小規模観光企業」、ウィリアム E. シーアボルト編著(1995)『観光の地球規模化—次世代への課題—』、玉村和彦監訳、晃洋書房。

1) 北海道大学大学院 国際広報メディア・観光学院
観光創造専攻 博士後期課程
《連絡先》E-mail: ishikawa@cats.hokudai.ac.jp